

パネルディスカッション

テーマ：みんなの「ふるさと」をつくる
—多世代交流を通した誰もが活躍できる地域づくり—

コーディネーター 牧野 篤 大正大学地域創生学部教授・東京大学名誉教授

パネリスト 小川 真実 一般社団法人mahaLim代表理事

パネリスト 古賀 優嗣 熊本大学名誉教授

パネリスト 田中 康裕 合同会社Ibasho Japan代表

[パネルディスカッションのアーカイブ視聴はこちら：](#)

牧野 篤



この高齢社会の、特にふるさとを作っていくとは一体どんなことなのかという形で、少し話を深めたいと思います。今日はこちらお三方です。一般社団法人mahaLim代表理事の小川さん、熊本大学の名誉教授の古賀さん、合同会社Ibasho Japanの田中さん、お三方にご登壇いただき、意見交換をしながら、少しふ

るさと作るとは一体どんなことなのか話をていきたいと思います。最初に、お三方は一体どんなことをされているのか、どんな縁があってここに上っているのかといったことを、お話を伺えればと思います。5分ぐらいずつご紹介いただけますでしょうか。お願いいいたします。

小川 真実



一般社団法人mahaLim代表をしております小川真実と申します。私は山形県南陽市出身で、今日は山形県から来ました。私の地元、南陽市なのですが、今日クマ騒動で、私の拠点の活動地域の小学校が臨時休校ということで、大変な騒ぎになっております。ネットニュースでも、小学校にクマが入ったということで大騒動になっているところです。

	<p>小川 真実（おがわ まみ）</p> <ul style="list-style-type: none">■ 山形県南陽市出身■ 資格 社会福祉士/介護福祉士 社会教育士■ 所属<ul style="list-style-type: none">・一般社団法人 mahaLim 代表理事・介護福祉士養成校 非常勤講師・NPO法人 Sisterhood 理事■ 職歴 ケアワーカー/相談員/ コミュニティソーシャルワーカー
---	---

日頃は一般社団法人mahaLimの代表理事をしながら、介護福祉士養成校の非常勤講師もしております。そのほか、女性支援をしておりますNPO法人Sisterhoodという活動をしている拠点があるのですが、その理事もさせていただいております。

私は、パンフレットの自己紹介のところに書いてありますが、中学校からボランティア活動にずっと取り組んで

おりました。その後、介護・老人保健施設や社会福祉協議会などで働くご縁があり、現在は介護福祉士養成校の非常勤をしながら、一般社団法人mahaLimの代表をしております。このmahaLimでどんなことをしているかというと、通常私たち、ごちゃまぜハウスと呼んでおり、多世代型の居場所を運営しております。



この活動として、設立時からの私の想いがあり、全国的に珍しい一つの建物で、相談、居場所、活動というワンストップで提供する新しい福祉の形を広めていきたいということと、地域の孤立や制度のはざまにある人たちをつなぐ社会の縁側のような、そして縁の下の力持ちのような存在としてありたいという願いを込めております。



mahaLimという言葉は聞き慣れない言葉かと思いますが、こちらは私が勝手に作った造語です。ですので、ハワイの言葉のmahaloと、Life is mineを掛け合わせて、mahaLimという言葉を作り上げました。この言葉の意味として、自分らしく地域で生きることを応援する団体ということで名付けております。

日頃どんな活動をしているかというところですが、こちらですべての世代を支援しております。こども支援や女性妊娠婦支援、その他高齢者支援や多世代との交流の場の提供、そして不登校ひきこもり支援など、全てにおいてワンストップで相談、そして居場所活動というところで取り組んでおります。

実際、南陽市の状況をお伝えすると、私の住んでいる南陽市は高齢化率が34%です。ほとんど高齢者の方が多いという地域で、人口は約3万人というところなのですが、もう既に3万人弱になっております。2万人台になっており、若者がどんどん都会の方で仕事をしているという地域柄です。出生数も昨年度は125人ということで、毎年赤ちゃんの生まれる数がどんどん減っている状況です。なので、ごちゃまぜハウスを通してコミュニティが生まれ、そこでお互いを助け合う。お互いさまという気持ちを育んでいきたいと思い、現在活動をしているところです。どうぞよろしくお願ひいたします。

牧野 篓

山形県は連日クマで話題になっていますが、一般社団法mahaLimでは、ごちゃまぜハウスを基本にしながら、多世代の方が一緒に生活できるような基盤づくりをされているというお話をありました。

古賀 倫嗣



熊本大学の古賀です。今日は、このタイトルにもありますように、みんなの「ふるさと」をつくる、これがこのフォーラムのメインテーマです。先ほど、ふるさとは何でしょかと問題提起もございましたが、それを今日は、熊本市ではなく、天草市宮地岳町の宮地岳かかし村の取組からお話したいと思います。

天草市誕生の背景
2005年の平成の大合併で本渡市、牛深市他8町が統合して天草市が誕生。

「少子・高齢社会」の進展
県内市町村の65歳以上の高齢化率（2020年）
1) 鹿本町：31.6%（全国28.8%）
【後期高齢者比率】熊本県：16.5%（全国14.9%）
2) ①山都町（51.2%）、②五木村（50.2%）、③美里町（47.0%）、④津屋町（45.7%）、⑤芦北町（45.2%）
⑥天草市（42.6%）、**⑦天草市（41.8%）**、鍋水俣市（41.2%）。

天草市の概況：
「少子・高齢化」と「中山間地問題」

人口の推移
人口の推移【20年間の減少率】
1) 天草市：2000年：102,907人、2010年：89,065人、2020年：75,783人【26%減】。
2) 宮地岳町：2000年：749人、2010年：573人、2020年：446人【40%減】。

大天草市構想の挫折
大天草都市を一つの大天草市にする構想は実現せず挫折。

これは校舎からのぞいた集落なのですが、天草は海と言われますが、山ばかりです。ちょうど日本渡から牛深に行く国道沿い、そこの山の中です。その取組をもう20年以上付き合いがあるということで、紹介したいと思っています。

言ってみれば、中山間地域の典型であり、かつ少子高齢化だけでなく、大地震もありましたが、水害の問題。たくさんの人口がこの10年間の中で県から消えています。そういう中での課題、このようなところを、一つ事例として考えてみましょうということで、そしてそれにもかかわらず、地域の高齢者たちが頑張っているかかし作り、これを紹介しながらエイジレスという問題を考えてみたいと思っています。少し細かい数字で恐縮なのですが、少子高齢化ということになると、熊本県は31.6%と3割を超えていました。ちょうど今国勢調査中

なので、このデータは来年分になります。そういった意味では2020年のデータということで、2000年から2020年の20年を大体念頭に置いています。その間に、特に赤になっておりますが、天草市は41.8%、熊本県全体よりも10ポイントほど高いです。ただ、これも順位は17番目ぐらいになっていますが、合併したためここになりました。

天草市や合併した市を見る時に注意いただきたいのは、旧町村単位で見てください。かつては天草市など、あれが3、4番目でしたが、本渡市の人口が大きいため隠れてしましました。隠れて見えなくなった社会問題、これが高齢化と言ってもいいでしょう。データには十分注意していく必要があります。人口の推移ですが、今申し上げたように、20年間の減少、天草市は、一応20年で26%ぐらいの減少なのですが、今日お話しする宮地岳町は、2000年の749人から2020年は449人、500人を割ってしまいました。減少率としては、40%の人たちが消えていった。特に若い人たちです。ということで今日は、人口よりかかしの数が多い街の話です。そこがかかしの持っている意味合いです。



そこで、宮地岳町との出会いと申し上げましたが、私は元々、社会学という学問なのですが、地域づくりの中で若者と女性、子どもと女性と高齢者、この3つの担い手をどうジョイントしていくかということが研究課題でありました。

まさに今日のテーマに即した課題なのですが、そうした中で、こどもたちにかかる時に通学合宿という手法を取りっていました。通学合宿とは、一週間、大体のところは3泊4日ですが、この通学合宿は一週間ります。2003年から7年間実施。これは、私が当時いた熊本大学教育学部の学生を生活スタッフとして、一緒に協力してやります。小学校4年生から6年生全員が公民館で1週間合宿しながら学校に通学。その間、自炊、洗濯等の生活体験プログラムを実施します。参考までに、この本家本元は福岡県飯塚市。合併前は庄内町でしたが、庄内生活体験学校というものが1979年、国際子ども年の頃から始めた取組をモデルとしております。なお、ここで4年生、6年生全員といいますが、数は15人です。小学校全体が30数人ですので、その何年か後に、統廃合されてしまいました。今日のもう一つの課題、かかしが1番目のキーワード。2番目は、統廃合された学校をどう利活用していくか。皆さんたちの地域にもそういう課題があるのではないかでしょうか。こうしたことについてお話ししようと思います。それとここで言わなくてはいけないのが、通学合宿と一緒に、私なんかも助言させていただいたのですが、担い手として地域の人たちをまとめていったのが公民館長、この公民館長が、これから述べるかかし村の村長さんになります。つまり、かかし村で突然出てくるのではなく、通学合宿という手法を通じて、公民館、ここから子ども館や児童館もあるので、こどもたちに関わって、関わりのスキルとこどもたちに寄り添うスタンス、この2つをしっかり持った指導者、地域のリーダー

ーがいたということです。尚、この宮地岳の通学合宿が、熊本県の最初の通学合宿になります。そういった意味では、担い手の問題、地域環境の問題、こういったことは後で、課題として出てくるかと思います。



さて、宮地岳かかし村ですが、もともと、ふれあいサロンの仲間でした。菜の花を作っていたのですが、やはり年を取ると、菜の花作りはちょっと体にこたえる、もっと簡単なものを作ろうということで、かかしに挑戦しました。

かかしを挑戦して2009年、初めは6体を作り、国道266のところが、地域の人たちは何の気なしにかかしを置いていたんです。ところがそこを通じる世界遺産などや牛深や温泉地があるので、そこを通行する観光客が記念撮影をしていました。記念撮影をしていて、ここにもセリフを書いておきましたが、これは熊日の営業ですので、「作ったかかしば写真に取りよう。」びっくりしました。これは3番目のキーワードです。自分たちが持っているもの、作っているものは、自分たちで評価することはできません。やはり遠慮することもあるでしょう。周りの人、特に県外の人たちがそれを評価し、すごいと言った。

そしてついでに、新聞に載ったときから動き出します。活動というのは、そういった外部からの評価があることで、どんどん充実を図っていく。人に伝える努力、そういったことが図られているということです。熊日新聞です。翌年は、これが6体でしたが、次は頑張って40体作りました。そしてせっかくだから自分たちの活動に名前をつけようと、それまでは宮地岳地域振興会という名前でしたが、宮地岳かかし村、名付け親は碓井さんという方で、今年87歳になります。後継者の問題もそろそろ出てきますが、中心として名乗り上げてまいりました。そして先ほど少し申し上げましたが、2012年にこの宮地岳小学校が統廃合され、校舎自体が廃校になります。そしてその統廃合した校舎を道の駅宮地岳かかしの里として再活用したのが、今日の4番目のキーワード、無くなつた校舎は、大体、軍手工場が多かったのです。軍手、手袋工場です。それをこの道の駅として国土交通省と交渉しながら行いました。これは西日本で初めて、全国でも3例目という素晴らしいアイデアでした。



そして最後の部分はこれからの話の流れ中でお話したいと思っていますが、タイトルだけ。「自分たちの『ふるさと』の持続的発展を踏まえた「みんなの『ふるさと』」の創造、みんなのふるさとづくりの一つ手前、これは自分たちの住んでいる街、地域、そこがきちんと持続的発展が可能な仕組み。

こういったものをしっかりと地域でアイデアを出し、そしてそれを、コミュニティマネジメント、村自治として組み立てていくということが、今日のシンポジウムの課題ではないかということで、ここにメモ程度に用意したところです。今日はかかしの話が中心です。

なお、今、右上の画面の一番奥に小さいものがありますが、これはお分かりになりましたか。くまモンです。どこにでも出てきます。これが熊本で、せっかくだからこの写真を使ってみました。どうぞよろしくお願ひいたします。

牧野 篤

一地域ですが、状況からかかしの村づくりという形で展開されてきた。そして何が大事かということをお話しいただきました。

田中 康裕



田中と申します。もともと出身が建築のため、高齢社会フォーラムに合わないと思つたりもしましたが、居場所みたいなことをしているのですが、建築のイメージとしては、新しい建物をどう作るかということをされてるイメージを持つのですが、でも実は建築はできたものがよく使われないと意味がないということで、建築をどう使うかということも、実はやっています。その中で、特に今日のお話でいろいろな活動がされていると思うのですが、僕の興味として、その活動がそもそもどういう場所で行われているのか。今、ネットなどいろいろありますが、人間は体があるので、体がある以上、絶対どこかで身を置かないといけない、どこかの場所が必要ということで、ではそういう場所、特に地域の活動する場所というのは、どういう形であればいいのかみたいなことは、興味を持って活動したり、研究をしたりということをしております。

田中康裕

・合会会社ibashi Japan 代表

・千里ニュータウン研究・情報センター 事務局長

・NPO法人、店舗活用創造プロジェクト（店場所ハウス） 理事

・2007年3月、大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）。専門は建築計画。

・大学院の頃から、千里ニュータウンの歴史・活力を発信する活動（現在の千里ニュータウンが何・何がセントラル）に参加。
「ひがしまち街角広場」を創設拠点とする

・2008年4月～2013年4月：清水建設（株）技術研究所の研究員

・2013年から、東日本大震災の被災地で「店場所ハウス」の運営に参加。英善に交わりながら、尼崎市の研究を行う

・2023年7月、合会会社ibashi Japan設立




ひがしまち街角広場

- ・大阪府四條畷市（千里山、タツミ）
- ・オープン：2001年1月30日
- ・千里山の街の核心、古書のセレクト、古本

店場所ハウス

- ・二子玉川和泉市、木見町
- ・イフア、2013年4月7日開業
- ・オープン当初から賃貸を中心に、老若

特に一番初めにどういう場所というのを教えてくれたのが、右上に書いてあるひがしまち街角広場という大阪の千里ニュータウンの空き店舗を使った場所なのですが、ここは大学の頃に調査をすることがあり、それがきっかけで関わらせてもらいました。



どういう場所かというと、ここはイベントや教室はせず、コーヒーや紅茶をお気持ち料と言っていたのですが、100円で提供しているだけです。そうすると別に活動しているわけではないため、ただしゃべっているだけではあるが、写真で写っているように一人でいる人もいます。

今日はたまたま男性は写っていないですが、男性もしやべらないが、コーヒーを飲みに来ると。あとやはりなかなか男性で話をするのが苦手な方がいるのですが、かといって別にしゃべれなくても、ただこういう場所でコーヒーを飲んでいたら顔見知りになれる。ただそれだけなのですが、こうやって毎日来ていると、あの人最近来ないからどうしているんだろうなと言って電話をしたりなど、家に様子を見に行ったりなど、実は見守りが行われていたり、ここは交番ではないですが、毎日開いているので、落とし物が届けられたりなどもしていました。写真の上方に、扉の外に子どもが写っているのが見えますが、実はこの前が学校の通学路になっており、子どもが水を飲みにおばちゃん水ちょうどいとと言って飲みに来る。水はもちろん無料で、そういう場所でもある。すると、その子どもと大人も別に水を飲みに立ち寄り、水をあげて帰るだけなので、一緒に遊んだり何かをしているわけではないですが、それだけでも顔見知りになれる。地域でそういった顔見知りができるというのが、実はこういう場所の活動ではなく、ただ日常のこういう場所はやはり大事だというのは、一番初めにこの街角広場という場所で教えていただきました。

その後、少し間が空きますが、2011年に東北の震災があった後に、街角広場などいろいろな居場所で教えてもらったようなことを、被災地で、何か恩返しのようにできたらということで、岩手県の大船渡市で居場所ハウスというところに関わり始めております。実は、居場所ハウスを一番最初にきっかけを作った方が、熊本出身の方が呼びかけの一人でもあるため、少し遠い場所ではあるのですが、熊本にもご縁がある場所となつております。



これが居場所ハウスの写真で、これは何をしている写真なのかですが、右側の女性が90代の女性で、もう亡くなってしまったのですが、居場所ハウスという、ここはカフェと食堂をやっていける場所なのですが、毎日のように来られていました。

ただ、この方は毎日来てお世話になっているのですが、毎日お世話になるだけじゃ申し訳ないと言い、時々リュックサックに砂糖や小麦粉などを持ってきて寄付してくださいました。この光景を見て僕が思ったのは、どうしても、まだ僕も40代なので、高齢の方を見ると、こういう地域でどうサポートするか検討すると、どうしても助ける側の視点になり、高齢者をどう助けるのかといった形で見てしまうことが多いのですが、この光景を見て、人というのは、何歳になっても役に立っているという、実家のようなものを抱くというのが大事なので、一方的にいかにサービスを提供するかというだけでは、おそらく何かが欠けているのだろうというのを、この光景から教えてもらったため、この写真を紹介させていただきました。

牧野 篤

ありがとうございました。建築ご出身なのですが、ものを作る、建物を作るよりは、どう活用するか。もっと言えば、居場所として皆さんがそこにいるだけでいい場所。そうすると、いろいろな関わりができるという話だつたと思います。どうもありがとうございました。これからお三方に色々お話を聞きたいのですが、お三方のお話を伺っていて、私が感じたのは、縦割りになっている社会はもうやめましょうと、皆さんはおっしゃっている感じがする。またはもう現場はそうじゃないとおっしゃったような感じがします。最初に小川さんがごちゃまぜハウスとおっしゃっていましたが、ごちゃまぜでいる。これは当然いろいろな人がごちゃまぜにいて、当然老若男女も一緒にいる。また、障害を持った方々も、もっと言えば定職に就いているか就いていないかなど、そんなことも関係がないような形で一緒にいるという話だと思います。

それから古賀さんの話は、かかし村という話が出てきましたが、人口よりもかかしの方が多いとおっしゃっていましたが、むしろ新しいものを始めていく中で、いろいろな自分たちが持っていた力が出てくるということの中で、新しいものが生まれてくる。そこでは当然、お互いのいろいろな関係が生まれ、そこからこうしよう、ああしようということが出てきたのではないかと思います。そういうことの中で、例えば外部から評価をされていくと、もっと嬉しくなって何かやってしまうということが起こるようになっている。これも一つの混ぜ方というか、ごちゃまぜではないかと思います。

それからさらに最後の田中さんですが、居場所、ただいるだけでいい、またいてもいい場所として作っていく。ある意味はお互いに気にかけ合うなど。またはいろいろなそれこそ老若男女がそこでいるだけで、お互いに何かやり始める、さらに申し訳ないからといって、自分にできることを探してやろうとするようになっていく。そして新しい関係ができるくるということをお話になつたと思いますが、そのように切り分けないことがいい。一緒にいられるようにした方がいいという話だと思います。そのあたりで今の私のまとめでいいかどうかも含め、少し皆

さんの実践の方から、本当はコミュニティまたは地元とはこうあるのではないかという思いがあると思いますが、そのあたりを少しづつ、一言ずつ、見方をお渡しいただけますでしょうか。

小川 真実

今のお話を受けて、私の同級生のことを考えると、半分くらいはもう地元に残っていません。そこで地元に残っている人だけで集まつた時に集まれる場というところがやはり限られてくる。そういうところから私も、自分の居場所が欲しいと思うようになりました。なので、居場所を始める。ここの大本の原点は、私も居場所が欲しかったというところです。欲しい場所というのはどこかのカフェということではないです。ファミレスでもなく、カフェでもなく、ただ時間も気にせず、そして周りの人々にあの人誰と気兼ねなく居られるような場所が欲しいというところから、私も今のごちゃまぜハウスの設立に至っています。ごちゃまぜハウスでは、縦割り社会は本当にありません。支えられる人、支える人という関係性ではなく、こどもたちがこどもたちの中で支え合い、支えたりなんていうことももちろんしています。それはどんなことかというと、子ども支援の中で、子ども食堂や子ども料理教室などをやっております。



子ども料理教室では、早くから子ども料理教室に参加した子たちが、後から入ってきた子たちに「こうやって作るんだよ」「食器はここにあるよ」あとは「この時はこんな風に量るんだよ」とこどもたち同士で教え合っています。

また、多世代の交流の場の時には、こどもたちと接する高齢者の方が生き生きしています。自宅ではもう嫁さんに台所を譲り、台所に立てなくなつたという年配の方が、ここでは生き生きとして天ぷらを作り、ほかにもカレーと一緒に作るという生きがいの活動にもなっているというところが、ごちゃまぜハウスの現状です。

牧野 篤

この居場所は、ご自身も欲しかったということなのですが、簡単に言えば、他人を気にせず、自分がそこにいてもいい場所、また時間などあまり気にせずにいてもいい場所としてあるが、そこに集まつくると、気にかけ合うようになる。そして何かやろうとすると教え合っていく。そしてそこで自分の役割が出てくると、どんどん生き生きとしてくるという、いろいろなところで起こっている現象だと思うのですが、高齢社会の一つのあり方だううと思います。そんな場所が、小さなところでできてきた。そんなお話をだと思います。

田中さんはいかがですか。こういった居場所を作つてこられ、今、小川さんがおっしゃったようなことというの、やはり日常的に生まれてきているのでしょうか。または、ある意味で仕掛けているのか、またはある意味で居場所を作つておけばどんどんそうしていくということなのか。その辺の実感としてはいかがでしょうか。

田中 康裕

仕掛けるかどうかは難しいですが、先ほどのご質問の属性が違う人が混ざった方がという話で、その方が役割は生み出されるのではないかという気がしています。例えば、先ほどの街角広場で子どもが立ち寄り、高齢の方が水をあげるというエピソードをご紹介しましたが、それは多分、高齢の方の役割を生み出していると思います。もし高齢の方をデイサービスに送り、子どもを例えば保育所に送り、分けてしまうと、高齢の方はデイサービスの中でしか生活できなくなるため、ここで生まれている役割のようなものがない、そもそも生まれなかっただろう。そうすると、属性が違う人がいろいろ集まってる方が、自分と違う相手に対して、自分が持つてることというのを見つけやすい気もするため、そちらの方が役割は結果的に生まれるということを感じております。

牧野 篤

ある意味で、属性が違うというのは、ごちゃまぜの一つの形です。同じ人たちが一緒に集まっているではなく、ならば縦割りや、又はある意味で、今までの工業社会の作り方です。みんな同じ人たちと同じように集め、学校教育もそうです。同じこどもたちを同じように学校の中に入れて、同じように教育をすることをやつてきたのですが、それは管理しやすいかもしれません、もうそういう社会じゃないのではないか。もっと言えば、そこに属性の違う方々が集まることにより、お互いにいいところを発見し合ったり、また自分のいいところを発見したりして、こんなことできると言い始めるようになってくる。そしてまたよりいい関係ができるくるということだと思います。古賀さんいかがですか。例えばかかし村で起こっていることというのは、次へ次へ展開していくような動きになっているのでしょうか。

古賀 優嗣

そうですね。かかし村の前に一つ前置きをさせていただいてもよろしいでしょうか。私は社会学、地域社会学ということで、そういう活動や運動のときに一番考えているのが、やはり県民性や県民の考え方です。つまり、それが足かせとなってきている。そこで、ごちゃまぜというのはいい言葉で、ですが、この言葉の背後にあるのは、多様性を認める、一人ひとりの存在を認める。決して上や下は見ない。そのごちゃまぜという人と人との関係づくりの真逆のあり方が熊本県だったと言っていいです。それはどういうことかというと、まず第一に男性本位である。男性中心の社会であったということ。次に前例主義。昔からあったことしか認めないと。そして、長老主義。まさに一番年齢の高い者がいばっていると言っては変ですが、そういう仕組みの中でごちゃまぜは許されない。だからこそ女、子どもという言葉があった。そして、その女性たちの受け皿となったのが、地域婦人会という受け皿であり、地域婦人会が少しずつ衰退していくと、女性はどういうグループングをやつしていくのか。そういう戸惑いの中にあったと思っています。そういう意味では、熊本県において大きな転換点になったのは、塩谷知事、女性知事、いわゆる民間としての2番目の知事。この人が出てきて、いわゆる男女共同参画の考え方が少しずつ浸透していく。

つまり、かかし村に戻ると、村の中でも女性が発言してもいいと。ただし、発言する以上はちゃんと仕事をしないとダメだというのが、これは男性には求められるのに、女性には求められないというのがあるのかもしれません、といった意味では、村の合意を経ながら、なぜ村の合意を経ながらかかし村が誕生したかという、

経験の中で先ほど申し上げましたこどもたち、小学校のこどもたちに関わる通学合宿があった。あるいは公民館にはお風呂がありません。お風呂がない以上、宿泊するためにはもらい風呂をしなくてはいけない。もらひ風呂に行くと、女の子、男の子、あるいはお父さん、お母さんといった性別にかかわらず、こどもたちと関わる人たちが出てくる。そういう意味では、この多世代交流という場合のこどもがいた、高齢者がいた、真ん中の担い手がどうなのかといったときに、子育て世代よりも少し上ぐらい、40代、50代の人たちが仕事をしながら何とかやってくる。先ほどかかしの写真をお見せしましたが、あれは村祭りの写真です。村祭りでみこしを担いでいた若い中年世代が、自分たちが出てこられないものなので、かかしという形で頑張ろうとする。そういう意味では、年齢を超えて、決して長老主義が克服されたとは言いませんが、それぞれの存在が認められつつある。例えば、かかしはずっと1か月置いてあるわけではありません。雨が降ったら壊れます。壊れたかかしを修理する人たちもたくさんいます。性別を問わず、ずっとやっていく。今年は70体のかかしが出ましたが、そういう具体的な場面に、やはり今おっしゃった、ごちゃまぜでこどもに関わる。ごちゃまぜで村祭りに関わるという大きな転換点が出てきた。少しオーバーな言い方になっているかもしれませんがそう考えています。

牧野 篤

熊本の方はいかがですか。厳しいお話が出たと思いますが。今のお話ですが、逆に言うと、高齢社会や少子化ということになる中で、従来の熊本のそういう県民性とおっしゃったことが通用しなくなってきたのではないかというのも聞こえると思いますが、いかがでしょうか。皆さん自分が地元で困ってらっしゃること、例えば後継者がいなくなった、高齢化の影響で、誰も後を継がないのではないか。もっといえば学校が無くなってしまう。自分たちの村、自分のふるさとはどうなるのだろうと考えたときに、もう誰もいなくなってしまっているということの中で、新しい取組が始まると。そして今おっしゃったように、かかしを作る。そしてそれをどう維持するかといったときに、例えば、今までのような男性中心だけではなくてもやっていけなくなってしまっている。そういう社会になってきた。それは逆に言えば、熊本だけでなく、私も日本全国各地を回っていますが、東京はまだ若者が集まっていますが、他の地域というのは、ほとんど同じような状況になってきています。そういう意味では、もう従来のような、男女を分ける、または男の方が上、女が下と分けていくような社会ではなくなっていて、分けているとダメになってしまう社会に入ったかもしれない。そうなってくると、どう混ぜるのか、どう関わりを作っていくのかといったことが大事になってくるのではないかと思いますが、この辺り、何かこう、今、吉賀さんは少し大きい話をされました、大きい話からこのかかし村という小さいコミュニティの話に收れんしていく、集中していくような話になったと思います。これからは自分が生きているこのコミュニティをベースにした形で、社会の草の根と言っている、お互いの関係性を整えていかなければいけなくなったのではないか。

今までのよう、例えば行政がやるから、国がやるから、県がやるからということでは、もう動かない社会になってしまったのではと思うのですが、このあたり何か実感をお持ちでしょうか。例えば小川さんいかがですか。地元で活躍、活動されていて、どんな感情をお持ちでしょうか。

小川 真実

私たちのここの事業所、拠点は、教育委員会もちろん関わってくださっており、行政の福祉課の方も関わってくださっていますが、やはり一番はそこに来ている人たちで空気を作り、居やすくする。そして困っていれ

ば、その人たち同士で支え合うというのが一番ベースにあります。なので、困っている人、そしてその場所で何か助けを求めているというのが、空気感で分かってくるため、そこで自分たちで声を掛け合っているのが実際今起こっています。

例えばどんなことかと言うと、10代の中学生の頃から長年引きこもったといいますか、学校に行けなくなつた子が、今実際にごちゃまぜハウスを利用しています。そこで私、介護福祉士の非常勤をしているので、そこで教えている子たちがごちゃまぜハウスにボランティアで出入りしています。そこで拠点に来ることによって、交流が生まれ、10代の4年、5年引きこもつた方が、初めて友達ができたと。涙ながらにお母さんも喜び、ここに来て本当に良かった。今まで友達ができず、誰とも連絡先の交換をしたことなく、親や祖父母だけと交流をしてきた子がいるのですが、その子が今、次のステップに進んでいます。次の目標ができて、今すごく生き生きとしてごちゃまぜハウスに来ることが楽しみで、そしてそこで生まれた交流をもとに、その子たちと今度県外に遊びに行こうという次のステージに進んでいるという、実際の上手くいっている流れも起きています。

牧野 篤

今、ごちゃまぜハウスで、今まで友達ができなかつた子がそこでできた、あるいは、受け止めてもらえたということなのだと思いますが、どうなのでしょう。今はそういうことが求められてきているというか、今まで友達ができなかつたのは、逆に言うと、今までの縦割り、学校の中のいろいろな競争社会や、同じように扱われたりすることの中で、例えば評価が低かったり、評価が低いと僕はダメな人間だと思ってしまうようなことが起こっている。競争社会はそういう社会だったと思うのですが、そういうところにもなじまない子たちがいっぱい出てきていて、むしろちゃんといだけで認めてもらえて、そして受け止めてもらえることの中で友達ができる、新しい動きがでてくる、そのような感情を持っていらっしゃるということでしょうか。

小川 真実

おっしゃるとおりで、もう1個実は例がありまして、小学3年生の男の子なのですが、学校では問題児と言われるような子です。授業中もテンションが高くなると、クラスの中でワーッとにぎやかになり、友達や先生に静かになどと言われるような子なのですが、ごちゃまぜハウスに来ると、その子は料理教室に来ているのですが、未就学児の男の子のお世話を一生懸命してくれます。エプロンをつけたり、バンダナを結んでくれたり、そして小川さん、次何するのと仕事を求めてきます。そういうことが学校の中ではなかなか受け入れてもらうことができないのだと。自分の居場所は、この場所でいいのだということを彼は実感しているようで、毎週のようにごちゃまぜハウスの料理教室に来ています。

牧野 篤

それは、言い方を変えると、役割がある、人から認められるということが大事で、学校の中にいると、変な言い方をしますが、否定されがちになり、ある意味で枠にはめられがちになってしまうのを、受け止めてもらう中で、自分自身の役割が出てくると、問題行動だと思われたことが問題ではなくなってくる。またはそれが出てこなくなる。もちろん、うまく生きていこうとするようになってくるというような、そういうことなのでしょうか。

小川 真実

おっしゃるとおりです。

牧野 篤

古賀さん、例えば、先ほどのかかしの話を聞きたいのですが、皆さんのがかしを作られて、そして主役になつていかれていると思いますが、そういうお互いの関わりの中で、大人も変わっていける、またはそこにこどもたちが巻き込まれていく中で、変わっていくことがあったと思います。その辺りをどのように見ていらっしゃいますでしょうか。

古賀 倫嗣

そのことが一番大事なことです。ただ、かかしというときに思うのは、こどもたちがどんどん目の前から消えていってしまう。つまり、地域づくりの出発点にあるのは、特に熊本がそうなのですが、集落の危機、コミュニティそのものが成り立たない。2000年の初頭に限界集落という言葉がはやりましたが、限界集落となってどうするのか、山村地域のため下りるしかない。コミュニティ移転というところにあった。そのときに踏みとどまり、そしてよそから何かを輸入するのではなく、地元にあるワラ、あるいは古着、こういったものを活用して何かできないか。ですから、先ほど、みんなのふるさとづくりの一つ手前に、自分たちのふるさとづくりと言いましたが、自前で家の中で転がっているような古着、これを使って自分たちが楽しもう、よそ様を楽しませるのではなく、自分たちが楽しもう、そして児童館があるので、こどもたちも楽しもう、そしてここはいろいろな教育熱心な地域でもあるため、学校に行ったりするときに孫世代がそこに来ています。

そういう意味では、一つの集落の中での、多世代家族とでも言いましょうか。その中でじいちゃん、ばあちゃん、最近何をしているだろうか。かかしを作る。かかしを作つて何になるかというマイナスのイメージだったのが、繰り返しになりますが、それを見て写真を撮る。決定的なのは地元の新聞にカラー刷りでじいちゃんが出てくる。こういった中で、評価が変わってくる。じいちゃんすごいというのは、直接ではなく回的なもの。だからこそ、ここで大切なのは外に対する情報発信。こういったことを担う人たち。今、どんなところに行っても、デジタル好きなお年寄りさんがいらっしゃるので、ホームページを作つたり、こういった形で発信する。それを見てまた集まつてくる。

実は先ほど、この村は今449人ですと申し上げましたが、年間3万人の交流人口がいます。3万人の応援団がいるというのが、かかしがもたらした効果と言っていいかもしれません。こどもたちに対して、こんな地道な活動だが、次につながる持続可能な活動なのだということが見える化されたのだと考えています。

牧野 篤

今、かかしを例に挙げられて、今お聞きして、大事なことがいくつあるのを思いましたが、一つは、じいちゃん、ばあちゃんの世代と孫の世代で、よく一般に言われるのは、私たちのこの人間の社会というのは、三世代中抜きでつなげられてきたという言い方をします。じいちゃん、ばあちゃん、それから現役、孫で、現役は忙しいから抜かれていて、じいちゃん、ばあちゃんと孫でつながってきたのではないか。それは、いわゆる血縁でと

いう話になりますが、今この社会は家族の関係でいけば、今、例えば一人暮らしが多かったりで、つながっていきませんが、社会として見たときに、高齢の方が増えていくというのは、やはりその地域で三世代でつながることができるような社会が生まれたのではないか。そしてそこにもう一つは、先ほどから吉賀さんが強調されています、他者から認められるというか、誰かから認めてもらえると同時に、このコミュニティ以外の方々からすごいねと言ってもらえるということがあります、私たちの言葉で、実は交流の鏡効果と言ったりします。外部の人が来てくれると、地元から見ると普通の話であるものが、とても美味しかったり、とても素敵なものに見えたたりする。そして外部の人がすごいですねと言ってくれることで、自分たちの価値に気づいたり、自分のプライドが高まっていくようなことが起こる。そうすると、もっと一緒に頑張ってやろうということが起こるようなことがある。そうなると、今度は孫から見ていると、素敵なおじいちゃん、おばあちゃんがそこにいることになり、また一緒にやりたいという気持ちが出てくる。そんなことがここで生まれているのではないかと思いました。

田中さん、いかがですか。居場所作りをされてきて、いろいろな交流がそこで起こってくると思うのですが、居場所が、何と言うのでしょうか、それぞれの人にとってとても大事なものになっていっているのではないかなども思うのですが、それはどんな形になっていると受け止めていらっしゃいますか。また、何がきっかけで、そこがその人にとってかけがえのない場所になっているのだと感じていますでしょうか。

田中 康裕

難しいかもしれないですが、自分にとって大事な場所とはどういうことか。やはり何かがあつたら気になる、何かを助けたいと思える、そういうところなのかと思っています。先ほどの子どもと高齢者の話で、居場所ハウスだと、高齢の方が盆踊りをしたり、子どもの日にイベントをやり、高齢の方が子どものため行事を開くことがあるのですが、そういうことを子どもが見ていると、地域にはこんなお年寄りの大人がいるのだということが分かる。分かるこの何がいいのかを考えつつも、まだどういう意味かはわからないですが、なんとなく、今思っているのは、例えば親しい友人と家族だと、ネットもある、電話もある、LINEもある、場所が別に離れていても、いつでもコミュニケーションできるが、地域の人は別にわざわざ子どもと大人がLINEするわけではなく、そこに行かないと会えない人がいると思うので、別に友達ではないが、そこに行ったら顔を見るという、別に名前も分からないが、居る人の顔が分かっているような場所があるということが、多分、子どもにとっても、大人にとっても大事で、それが日常の居場所、イベントや行事をするのではなく、日常的な場所の意味とはそういうところのかと思っております。

牧野 篤

今、顔が見えることが大事なんだと。名前が分からなくとも、顔が見えることが大事だとおっしゃいましたが、今伺つて私もある知り合いの言葉を思い出しました。例えば、学校とかいろいろな地域で挨拶運動をやろう、声掛け、挨拶をしようと言うが、子どもたちはあまり挨拶をしてくれない。その人がやっているうちに、子どもから言われた言葉があり、何かというと、知らないのに挨拶なんかできないと言われたと言いました。簡単に言えば、知らない人に挨拶しますかと言うと、多分普通の人も挨拶しないということになると思いますが、たまたまそこにいるから挨拶をしているが、子どもたちにしてみると、顔が見えない普段知らない人に対して挨拶をしなさいというのは、無理があるのでないかと思い直したと言います。そしてその人はどちらかというと、まず

挨拶の前に顔をお互いに知ることなのだ、交流することが大事なのだという形で地域の在り方を変えていくうとされて、そうしたところ、お互いに道をすれ違うところで、ここにちはというようになってきたと言うのです。そうすると地域全体の雰囲気がガラッと変わっていくことが起こる。そんなことがあります大事なのではないか。それを居場所と言ってみたり、またはつながりと言ってみたり、そんなことになるのだろうと思うのですが、そういうことが重なっていくと、そこがふるさとになっていく。先ほど古賀さんがおっしゃったように、みんなのふるさとの前に、自分たちのふるさとを作るというときも、自分たちという関係がそこにちゃんとあるということなのだろうと思います。

そうすると、例えば、小川さんがやっている取組や、田中さんがやっている取組も、ある意味で場所を作っていくことによって、そこを自分たちのものにしていく。そこがふるさとなしていくような作り方、そこから広げていくことにつながるのではないかと思い、お話を伺っていました。

最後に一言ずつまとめていただき、もし会場の方で皆さんから何か質問等がありましたら、お出しいただければと思うのですが、いかがでしょうか。では簡単に、先に小川さんの方からふるさとは一体何なのかというお題が出されたときに、どのようにお答えになるかということで発言をお願いします。

小川 真実

ふるさとと言われたときに、自分の生まれ育ったところももちろんふるさとだと思いますが、私は、心が許せる場所がふるさとなってくるのではないかと思っています。心の居場所というところも、私はとてもこのごちゃまぜハウスの中では大事にしています。心が休まらない場所では、結局ここに来る意味もないですし、来たいとも思わないだろうと。だからこそ、そこにいる人たちの創る空気感ももちろん大事で、私たちスタッフが、縁の下の力持ちとして関わる者たちの役割的なところも見えてくると思いました。

牧野 篤

生まれ故郷という言葉がありますが、もしかしたら生まれ故郷そのものも、皆さんにとってみれば、心のふるさと、心の居場所というか、そんなことなのではないかと思い、お話を伺っていました。古賀さんいかがでしょうか。

古賀 優嗣

みんなのふるさと。この言葉を聞いた時に、私が今非常に強くイメージしているのは、子ども食堂です。子ども食堂こそ、みんなのふるさと、あるいはみんなの居場所の内実を、可能性を占めて、産んでいると考っています。子ども食堂というのは、実は2012年、東京の大田区で初めてできました。気まぐれ八百屋だんだんというところから出発し、今年が14年目ぐらいになります。それを作った近藤さんという人は、歯科衛生士で、歯のことをやっているので、食べ物に非常に关心があった。つまり無農薬野菜を売りたいということで、八百屋を始めたのであり、八百屋専業ではないです。つまり、この人がそういったきっかけで、体のためや、食育という原点があったからこそ、子ども食堂が大きな共感を受けたのだろうと思います。もちろんネーミングも良かったです。それともう1点、去年初めて子ども食堂が全国で1万件を超えました。熊本県の数字が199となっており、多分200を超えたでしょう。その時に、私はテレビコマーシャルを考えるのでした。

松重豊さんは孤独のグルメの主役ですが、公共放送の広告に彼が出てきて、180cmぐらいあるのか、あ

あいう長身の人が子ども食堂に入り、仲間に入れてくださいと言って、みんな僕もいていいのかなと言って、あれは支えるNPO団体が知恵を出していて、あの多分30秒から40秒のフィルムだと思いますが、こどもに関するスキルが全部入っています。言葉を言うときの目の高さ、そして使ってはいけない言葉、もう全部あの30秒の中に入っています。あれをご覧になる。そして最後に松重豊がこう言います。「子ども食堂って、こどもたちだけの食堂じゃなかったんだ。」「みんなの食堂だったんだ。」あれがみんなのふるさとなり、そこに来る人は、もう誰彼なく受け入れる。そして、誰彼なく受け入れるが、黙って茶碗を洗ったり、弁当を片付けたりする。そういった、その人ができる役割をきちんと果たす中で、概ね月一回の開催が多いので、そう関わってくる。子ども食堂というのは、先ほど地域婦人会が女性の受け皿と言いましたが、私も熊本でかなり知っていますが、これまで何にもしてなかった、ボランティアにも関心が無かったような人が、子ども食堂の担い手として出てきています。ですので、次の問題になるのかもしれません、新しい多世代交流の担い手というのは意外などろにいるのだと。子ども食堂というみんなが納得するムーブメント、きっかけさえあれば、広がっていくと。そんな実感を70歳を超えた私が思っているというのが、まさにふるさとです。私から以上です。

牧野 篤

ふるさと、誰がいてもいい場所であり、みんなの食堂になっていく。これは言い方を変えれば、この高齢社会とはということとも同じことです。高齢社会というのは、別に高齢の方々だけの社会ではなく、みんなの社会であり、そして今日、議論になりましたように、縦割りで一人が一つの仕事しかしないような社会ではなく、みんながそれぞれの力を発揮し合いながら、お互いを認め合い、そしてお互いの力を引き出し合いながら、みんなの社会を作っていく。そうしたものが、この新しい高齢社会なのではないかという、そういうイメージにつながるようなお話だったと思います。どうもありがとうございます。では、田中さん、いかがでしょうか。お願いいいたします。

田中 康裕

僕は京都出身なのですが、岩手の大船渡にずっと関わっているので、大船渡はふるさとっぽいと思います。それは何だろうと思い、顔見知りの人がいる場所というのがふるさとなのかなと。その顔見知りの人の中に、もちろん友人もいていいと思いますが、友人だけではダメだと思います。友人だけだと、先ほどのとおり、メールなどで何でもできてしまうので、別に地域でなくてもいい。そうすると、友人もいていいが、顔見知りの人がいるというのが、なんとなく僕の中のイメージとしてふるさとであると感じます。

牧野 篤

顔見知りであるというのは、ある意味でほっとできる、安心している、自分もその人のことを認めているという関係があると思います。そんなことの中で、そこが自分の足場になっていくような感覚を持つ。そして、ふるさとだと見えるような、そして今度は逆に言えば、このふるさとのために何かしていこうという、そういう思いが生まれてくるような、そんな場所だとおっしゃったのではないかと思いました。どうもありがとうございます。これで全体

のパネルディスカッションを閉じたいと思うのですが、いかがでしょうか。今日、全体を通して結構なので、会場の皆さんの方から何かご質問、ご意見または感想等ありますでしょうか。もしもあるようでしたら、少しお出しいただけるとありがたいと思いますが、いかがでしょうか。

参加者

私は、熊本で社会教育に関する仕事を四半世紀ほどしてきている者です。今日は牧野先生と古賀先生と、かつてお世話になったお二方の先生が登壇されるということで伺いました。私が長年やってきた社会教育でも、この福祉の領域でも、多世代交流や、誰もが活躍できる地域づくりというのは、とても重視されている部分かと改めて感じているところです。一方で、行政の縦割りの部分もあるというのもまた事実であると思っております。今後、福祉と社会教育が連携していく上で、特に大切にすべき視点などがありましたら、牧野先生と古賀先生からお聞かせいただけたらありがたいです。以上です。

牧野 篤

縦割りではないのではないかという話だと思いますが、私の専門が社会教育なのですが、社会教育をやってこられて、こういう場所があり、むしろ福祉や、教育など、いろいろな融合をしていくことではないかというお話をあると思うのですが、そのことの中で、気をつけること、また、るべき形が何か、どんなことだろうかということだと思いますが、古賀さんはいかがですか。

古賀 優嗣

簡単に一言。社会教育、学校教育も含めて、教育と福祉の連携、協同、これまで、共通のテーマや考え方がなかったです。それが昨年、文部科学省がウェルビーイングというものを第四期の教育推進基本計画などを盛り込みました。ウェルビーイングとは、もともと、障害者福祉の中から起きた考え方で、そういう意味では、今、学校で例えばこどもたちがふわふわ語というものを使ってます。傷つけない言葉。これは言ってみれば差別ということを考える、人権ということを考えていく。そういう意味では、ウェルビーイングという言葉は難しいですが、それを地域の暮らしの中にこどもたちが生かしていく。そしてそのこどもが家に帰って、お父さんお母さんに今日ウェルビーイングを勉強したよと、こんなことだよと傷つく人がいない。

ウェルビーイングというのは、誰一人取り残さないというSDGsの根っここの部分と重なっているわけで、そういう学校生活で変わっていったこどもが家庭を変えていく。昔の社会教育と全く同じだと考えています。以上です。

牧野 篤

私も基本的には賛同したいと思います。もう一つ言いますと、社会教育というのは、学校教育がメインで作られています。明治以降ずっとです。ですので、皆さんの地元は学校区が自治会、町内会であったり、もっと言えばいろいろな高齢者クラブであったりなど、いろいろなものを全部学校区が基本で作られてきている。しかも、こどもたちは学校系を通して就職をして出て行ってしまう。全部学校が基本で作られてきた。その意

味では、社会教育や社会福祉というのは、例えばうまく学校に乗れなかつた方々、学校からこぼれ落ちた方々に対して、例えば貧困化してしまうので、福祉的な手当を出して底支えをする。教育はさらにそこで教育的な手当をして、自立していただくような力をつけてもらうという形で一緒にやってきました。ただ、これが社会が発展する中で、どんどん縦割りになってしまします。ただ、改めてこの高齢社会の中で、融合しなければいけなくなってきたのではないかと私も自身も思います。さっきのウェルビーイングという言葉も教育振興基本計画に入れたのは、私たちが関わって入れてきたのですが、やはり新しい領域横断的な、縦割りでない、横串を刺すような、そういう言葉が出てきて、お互いそれを使いながら、新しい社会を作りましょうという関係になってきているので、行政も融合していく必要があるのではないかと思います。

手前味噌になりますが、こういうフォーラムを、今回は内閣府がやっているといったことに、私は大きな意味があると思っています。これはプラットフォームという土台を作っています。その上で、従来の縦割りのものが乘っていくと、お互いうまく動くという仕組みづくりにつながるのではないか。ただ、それが残念なことに、高齢社会というと、いや、福祉でしょう、厚労省でしょうというような話になっていくと、元の縦割りに戻ってしまう。それはもっと言えば、地元もそうなっていくと、また縦割りで地元が割れ、バラバラになってしまいます。そうではなく、高齢社会というのはこどもたちのために、みんなが一生懸命になる社会など、また、こどもも若者もみんないる社会で、ただ高齢者の方が少し比率が多くなった。逆に行けば、こどもに関わる人が増えてきたんだと考えてみたら、この社会はどうなるのだろうか。そのようなことを私たちも考えなければいけない時代に入り、そういうことの中で自分たちのコミュニティ、地域社会をふるさととして作っていき、次につなげていくにはどうしたらいいかということを考えなければいけなくなった。そういう社会に私たちは今、立ち入っているのではないかと思っています。その意味で、今回のこのフォーラムが、皆さん、ご自分のふるさとを考えて新しくふるさとを作っていく何かのきっかけになれば、とてもありがたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。

